

わたしたちの

道徳

小学校一・二年

学校名

一年

組

二年

組

名前

わたしたちの

道徳

小学校一・二年

文部科学省



道徳

わたしたちの

小学校一・二年



道徳

どう

とく

わたしたちの



もくじ

● この本の つかい方	4
● あなたの ことを 教えてね	6

1 自分を 見つめて

(1) きそく 正しく 気持ちの よい 毎日を	10
読みもの るっぺ どう したの	16
■ 生活を ふりかえって みよう	20
(2) 自分で やる ことは しっかりと	22
読みもの 小さな どの力の つみかさね	28
―二宮 金次郎―	28
(3) よいと 思う ことは すすんで	32
読みもの ぽんたと かんた	38
■ しては ならない ことがあるよ	42
(4) すなおに のびのびと	44
読みもの お月さまと コロ	48

2 人と ともに

(1) 気持ちの よい ふるまいを	54
読みもの たびに 出て	60
■ せかいの 「こんにちは」「ありがとう」「	64
(2) あたたかい 心で 親切に	66
読みもの はしの 上の おおかみ	70
(3) ともだちと なかよく	74
読みもの およげない りすさん	78
(4) お世話に なって いる 人に	82
かんしゃして	82

3 いのちを ふれて

(1) いのちを 大切に	90
読みもの ハムスターの 赤ちゃん	96
■ 生きて いるって すばらしい	100
(2) 生きものに やさしく	102
読みもの 虫が 大すき	106
―アンリ・ファール―	106
(3) すがすがしい 心で	110

4 みんなと ともに

(1) やくそくや きまりを まもって	118
読みもの 黄色い ベンチ	124
■ きまり カルタ	128
(2) はたらく ことの よさを かんじて	130
読みもの 森の ゆうびん屋さん	134
(3) 家族の やくに 立つ ことを	138
(4) 学校の 生活を 楽しく	144
(5) ふるさとに 親しみを もって	150
読みもの ぎおんまつり	154

よい ところを 見つけたよ	158
読みもの まんがが すき ―まんが「サザエさん」を作った 長谷川町子―	162
みんなと なかよく	166
ほかの 国の ことを 知ろう	170
● 道徳で 学習した ことを 書きましよう	174

この本のつかい方

学校で

● 道徳の時間で

● そのほかのじゅぎょうで

● 休み時間や ほか後に

家で

● 家の人と いっしょに

地いきで

● 地いきの 人と
いっしょに

書いたり ぬったり
してみよう。



読みものを 読んで、
考えよう。

ともだちと、考えを
話し合ひましょう。



家の 人に
書いて もらいましょう。
いろいろな 人と
話し合ひて みましょう。



いつでも、どこでも、
生きていく上で 大切なことを
考えて、自分の 生き方に 生かして
いこう。

あなたのことを教えてね

1年ねん

すきな 食たべもの

とくいな こと

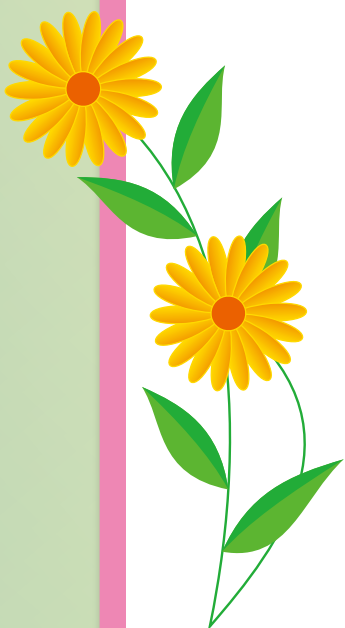
たからもの

いちばん うれしかった こと

すきな あそび

できるように なりたい こと

しょう来らいの ゆめ



2年

すきな 食たべもの

とくいな こと

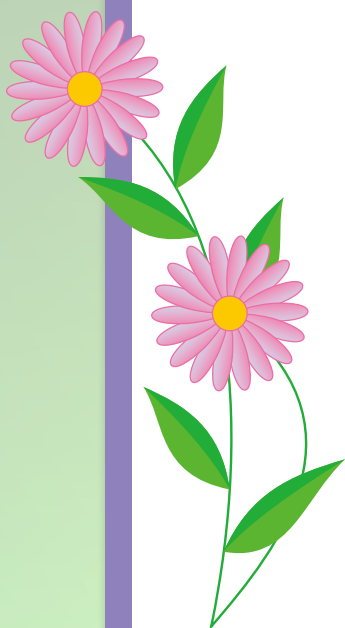
たからもの

いちばん うれしかった こと

すきな あそび

できるように なりたい こと

しょう来らいの ゆめ



いちねんせい
一年生の ときと 二年生の ときとで、
かわって きた ことが ありますか。

1 自分を 見つめて

(1) きそく 正^{ただ}しく 気^きもちの よい 毎^{まい}日を

(2) 自分で やる ことは しっかりと

(3) よいこと 思^{おも}うことは かならず

(4) すなおに のびのびと

(1) きそく 正しく 気もちの よい 毎日を

気もちの よい 一日を いちにち 過ごす すごす ために、
 どのような かことに 気をつければ かんがよいのかを
 考えて かんがみましょう。



1年

	ランドセル	教科書	ものの 回りの
			月／日 (たしかめた 日)
○	○	○	
○	○	○	
○	○	○	
○	○	○	
○	○	○	

● みの 回りの ものを、かたづけ ことが
できて いますか。
学校での 様子を たしかめて みましょう。
できたら、○に 色を ぬりましょう。



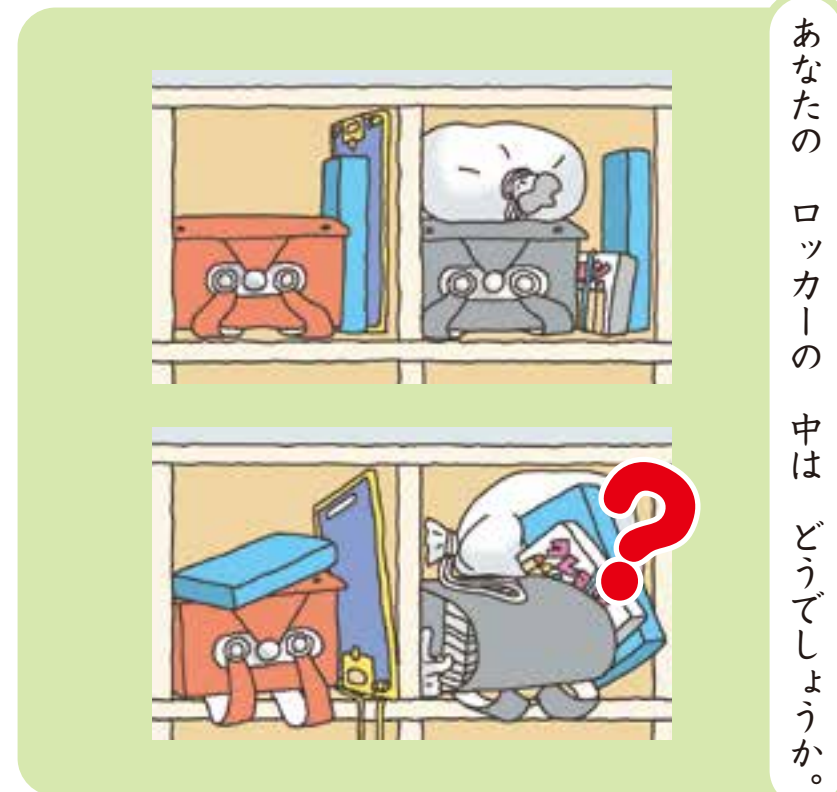
あなたの つくえの 中は どうでしょう。

つくえや ロッカーの 中など、みの 回りの
かたづけが できて いますか。
学校での 様子を 思い出して みましょう。

2年

家の 人から

	ランドセル	教科書	ものの 回りの
			月／日 (たしかめた 日)
○	○	○	
○	○	○	
○	○	○	
○	○	○	
○	○	○	



あなたの ロッカーの 中は どうでしょう。

1年

	ふく	本	ものの 回りの
			
○	/	/	月/日 (たしかめた 日)
○	/	/	
○	/	/	
○	/	/	
○	/	/	
○	/	/	

● みの 回りの ものを、かたづける ことが
できて いますか。
家での 様子を たしかめて みましょう。
できたら、○に 色を ぬりましょう。

2年

家の 人から

	ふく	本	ものの 回りの
			
○	/	/	月/日 (たしかめた 日)
○	/	/	
○	/	/	
○	/	/	
○	/	/	
○	/	/	



自分の 本や ふくなど、みの 回りの
かたづけが できて いますか。
家での 様子を 思い出して みましょう。

● どう すれば 気持ちよく すごせるかを、考えて 書きましょう。

Writing area for the student's response.

るっぺ どうしたの

「るっぺ、るっぺ、おきているの。」

お母^{かあ}さんの 声^{こえ}が、遠^{とお}くから

聞^きこえて きました。

目^めざまし時計^{どけい}も、

さっきまで、遠^{とほ}くで

鳴^なって いたようです。

「るっぺ、やっぱり おきて

いなかったのね。毎朝^{まいあさ}、同^{おな}じ

ことを 言^いわせないで ちょうだい。」



今度^{こんど}は、るっぺの すぐ そばで、

お母^{おは}さんの 声^{こえ}が 聞^{きこ}えました。

でも、るっぺの 目^めは あきません。

* * *

「るっぺくん、早^{はや}く。おくれちゃうよ。」

ぴよんたくんは、足^{あし}を バタバタさせて います。

「だってえ。」

るっぺは、口^{くち}を とがらせて います。

「るっぺくん、くつの かかとを

ふんで いるよ。きちんと はきなよ。」

ぴよんたくんは、足を バタバタさせながら 言^いいました。





「だってえ。」

るっぺは、口を とがらせたまま
下を おいて、くつを 直そうと
しました。

ランドセルの 中から、いろいろな
ものが、みんな とび出しました。

* * *

「るっぺくん、やめて。」

クラスの みけさんと めえさんが、
大きな 声で 言いました。

「いやだね。」

るっぺは、何が 気に入らないのか、
ほおを ふくらませたまま、すなばの
すなを なげて います。

「るっぺくん、すなが 目に入ったら、

どう するの。やめて。」

みんなは、こわい 顔を

そろえて 言いました。

「いやだね。」

と るっぺが 言った とき、

ぽんこさんが 目をおさえて

しゃがんで しまいました。

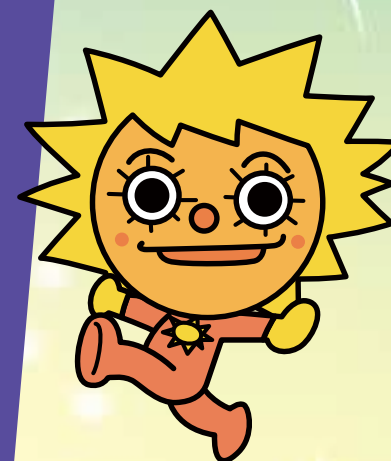


生活をふりかえって みよう

生活のリズムをととのえて、元気にすごしていますか。
毎日の生活をふりかえって みましよう。



はやおきくん



早おき して いるかな。

早おき すると、
生活のリズムが ととのうよ。

みそしるちゃん



あさごはんまん



朝ごはんを しっかりと
食べて いるかな。

朝ごはんを 食べて、
元気に 行っています。

早く ねて いるかな。

すいみんを しっかりと とって、
元気な 体を つくろうよ。

はやねちゃん



元気に うんどう しよう。

体を うごかすと、夜は
ぐっすりと ねむる ことが
できるよ。

よふかしおに



© やなせたかし

(2) 自分でやることはしっかりと

自分でやらなければならぬことが
いろいろありますね。
あなたは、どのようなことをがんばって
いますか。
絵を見て、話し合いましょ。



家の人から



1
年

自分で やらなければ ならない ことを、
しっかりと やって いますか。

勉強
べんきょう

やらなければ ならない こと

☐ ☐ ☐ ☐ ☐


わたしの 家での しごとは、
おふろそうじです。前は、お父さんに
たすけて もらって いたけれど、今は
一人で できるように なりました。
これからも がんばって つづけて
いきたいです。

● 自分で やらなければ ならない ことを
書きましょう。
できたら、○に 色を ぬりましょう。

学校での
しごと

やらなければ ならない こと

☐ ☐ ☐ ☐ ☐


家での
しごと

やらなければ ならない こと

☐ ☐ ☐ ☐ ☐


家の
人から

● 自分で やらなければ ならない ことを
書きましょう。
できたら、○に 色を ぬりましょう。

学校での
しごと

やらなければ ならない こと

☐ ☐ ☐ ☐ ☐


家での
しごと

やらなければ ならない こと

☐ ☐ ☐ ☐ ☐


家の
人から

2
年

勉強

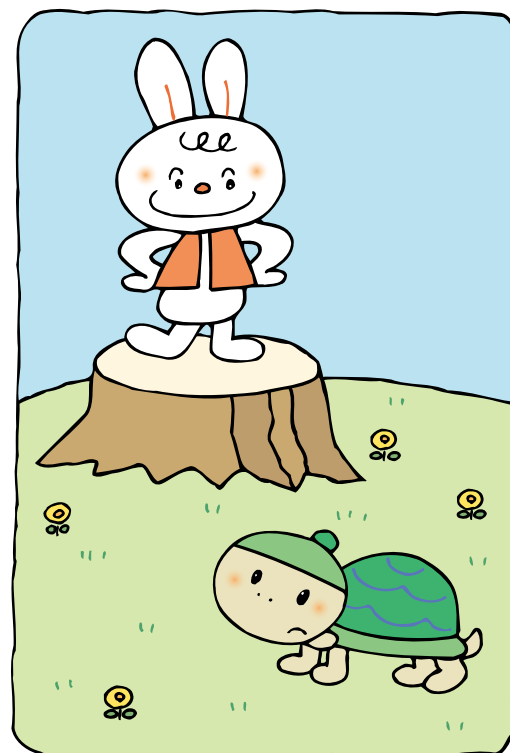
やらなければ ならない こと

☐ ☐ ☐ ☐ ☐

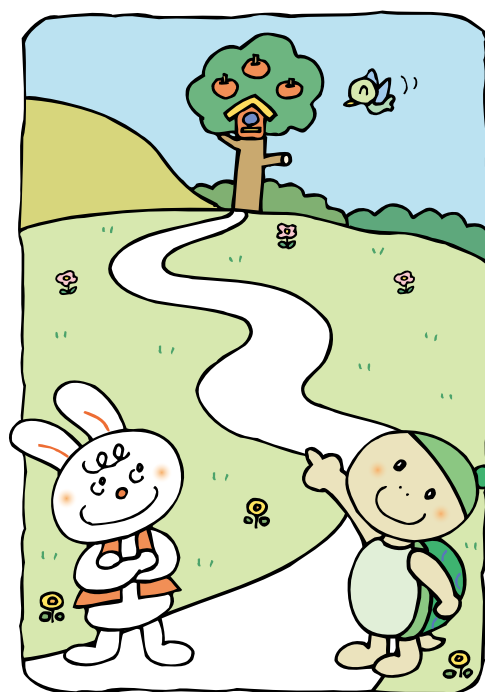

ぼくは、家で 毎日 音読を して います。
今、学校で 勉強して いる ところや
これから 勉強する ところを、声に 出して
読んで います。
音読を して おくと、学校での 勉強も
よく 分かるので、これからも
がんばりたいと 思います。

へやぎと かめ

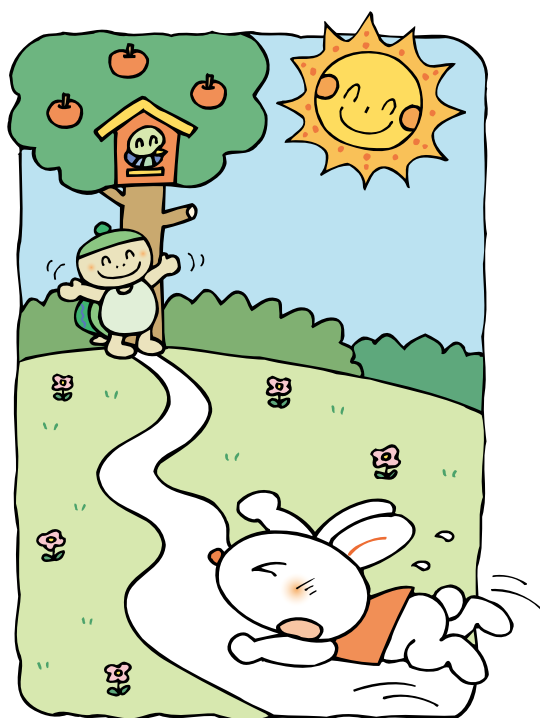
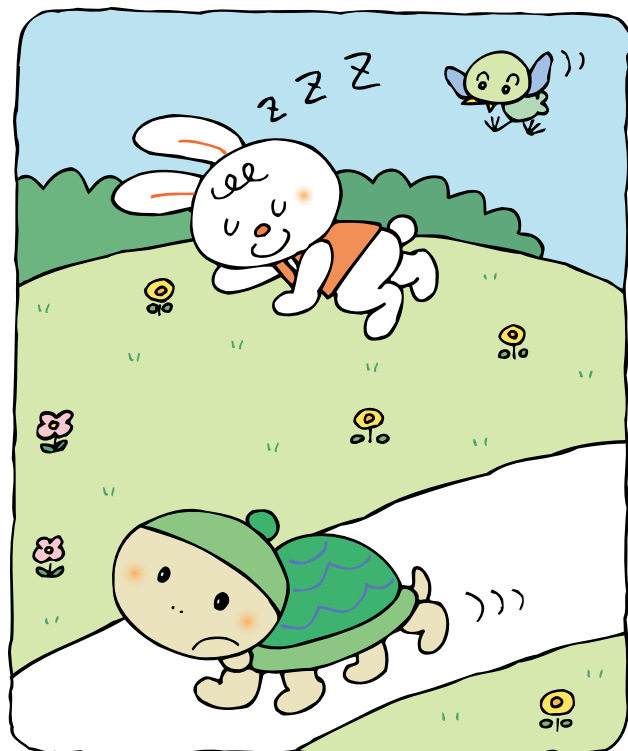
「もしもし かめよ かめさんよ
せかいの うちで おまえほど
あゆみの ろい もの は ない
どうして そんなに ろいのか」



「なんと おっしゃる うさぎさん
そんなら おまえと かけくらべ
むこうの 小山の ふもとまで
どちらが さきに かけつくか」



「どんなに かめが いそいでも
どうせ ばんまで かるだろ
ここらで ちよつと ひとねむり」
グーグーグーグーグーグーグー



「これは ねすぎた しくじった」
ピョンピョンピョン
ピョンピョンピョン
「あんまり おそい うさぎさん
さっきの じまんは
どう したの」

小さなど力のつみかさね——二宮金次郎——

二宮 金次郎は、まずしい農家に生まれました。

小さいころから、家のしごとをよくてつだいました。

金次郎が、十四さいのときに、お父さんがなくなり、

十六さいのときに、お母さんがなくなりました。兄弟と

はなればなれになり、家もなくなった金次郎は、

まんべえおじさんのお世話になることになりました。

金次郎は、おじさんの言いつけをまもって、一日中

しっかりと はたらきました。

金次郎には、ゆめがありました。

(何とかして、自分が生まれた家をつくり直したい。)

そこで、金次郎は、

(一生けんめいに勉強して、早く一人前になるぞ。)

と、心にきめました。

金次郎は、一日のしごとをおえると、

ねむい目をこすりながら、夜

おそくまで、本を読むのでした。

すると、まんべえおじさんは、

「明かりにつかうあぶらが

もったいない。早くねなさい。」

と言って、金次郎をしかりました。



金次郎は、もう勉強をやめようかと、
考えました。しかし、どうしても、
あきらめることができません。

そこで、知り合いの人から少しの*なたねを
もらって、土手にまき、世話をしました。

つぎの年の春、金次郎がまいたなたねは、
黄色い花を、土手いっぱいにさかせたのです。

そこからは、まいたなたねの何倍もの
なたねをとることができました。

そして、なたねをあぶらにとりかえてもらい、
また勉強することができるようになりました。



やがて、金次郎はりっぱに
せい長し、二十さいのときに、
自分の家をつくり直すことが
できたのです。



大人になった金次郎は、「尊徳」と
いう名前にかえました。そして、自分が学んだ、
(小さな)力のつみかさねが、大きなことにつながる。
ということを、多くの人たちに伝えました。

*なたね……なの花のたね。



武者小路実篤全集 第十卷 より
武者小路実篤

いいと 思った ことは
どんな 小さい ことでも するが いい



武者小路実篤

お話を 詩を 書いた
人です。人を 元気に
する 言葉を たくさん
のこして います。

(3) よいと思ふことは ちやうど

よい ことを すると、
とても 気持ちがいいよ。

よいと 思った ことは、
どんなに 小さな ことでも
すすんで やろう。

すすんで

よい ことを すると、
元気に なるよ。





らく書きがして
いいのかな。



お年としよりが
のって きたよ。



じゅぎょう中ちゅうなのに
いいのかな。



ごみが おちて
いるよ。



このような ときは、どう すれば よいでしょうか。
みんなで 話し合はないましょう。



よいと 思う^{おも}ことが

すすんで できた ことは ありますか。

1年^{ねん}

あなたが できた よいと 思う こと

よいと 思う ことが
できた ときの 気もち

● よいと 思う ことが
すすんで できた ときの ことを、
思い出して 書きましよう。
その ときの 気もちも 書きましよう。

1年

あなたが できた よいと 思う こと

よいと 思う ことが
できた ときの 気もち

2年

あなたが できた よいと 思う こと

よいと 思う ことが
できた ときの 気もち

● よいと 思う ことが
すすんで できた ときの ことを、
思い出して 書きましよう。
その ときの 気もちも 書きましよう。

2年

あなたが できた よいと 思う こと

よいと 思う ことが
できた ときの 気もち

ぽんたと かんた

ぽんたと かんたは、大の なかよしです。
きょう 今日、学校から 帰ったら、
いっしょに あそぶ やくそくを
して いました。

ぽんたが 公園に 行くと、
かんたは 先に 来て いました。
かんたは、公園の うら山で、
ひみつき地を 見つけたと よろこんで います。



「二人で 行こうよ。」
かんたは、ぽんたを さそいます。
「だめだよ。うら山には、入っては
いけないと 言われているよ。」
「へいき、へいき。」

かんたは、ぽんたの 言う ことを
聞かないで、さっさと うら山に
入って いきました。

一人に なった ぽんたは、じっと 考えて いました。
「ぼくも かんたのように あそびたいな。でも……。」

しばらくして ぽんたは、大きな^{おお} 声で^{こえ} 言いました。
「ぼくは 行かないよ。だって あぶないから。」



その 声が、とても 大きかったので、かんたが びっくりして、
うら山^{やま}から とび出^だして きました。

「ぽんた、どう したんだい。」

「ぼくは 行かない。よく 考^{かんが}えて きめたんだ。だって、うら山は
あぶないから。」

もう 一^{いちど}度、はっきりと 言いました。

かんたは、だまって 考えて いました。そして、きっぱりと
言いました。

「ぼくも 行かない。自分^{じぶん}で 考えて きめた。」

ぽんたは、にっこり わらって うなずきました。

二人^{ふたり}は、なかよく
ぶらんこに ゆられて
います。

気^きもちの よい 風^{かぜ}が、

ほおを なでて

いきました。



しては ならない いじが あるよ



いじわるを
しては
いけません。



うそを
ついては
いけません。

わるくち
悪口を
言っでは
いけません。



ともだちを
たたいては
いけません。



人の
ものを
かくしては
いけません。



人の
ものを
とっては
いけません。

(4) すなおに のびのびと

のびのびと 明るい 気持ちで 毎日を すずす ために、
 どうすれば よいのかを 考えて みましよう。

うそ ついちゃった。

本当は ぼくが やぶったのに、

弟が やぶったって 言っちゃった。

弟が、「フギャー」と ないた。

ロボットや ぬいぐるみが

ぼくを にらんで いるみたい。

このままじゃ いけない。

思い切って 「ごめんなさい」 って

言っ て みた。

すっきり して 気持ちがいいな。

「もう うそなんか つかないぞ。」



● あなたが 正直に できた ときの 気持ちを 書きましよう。

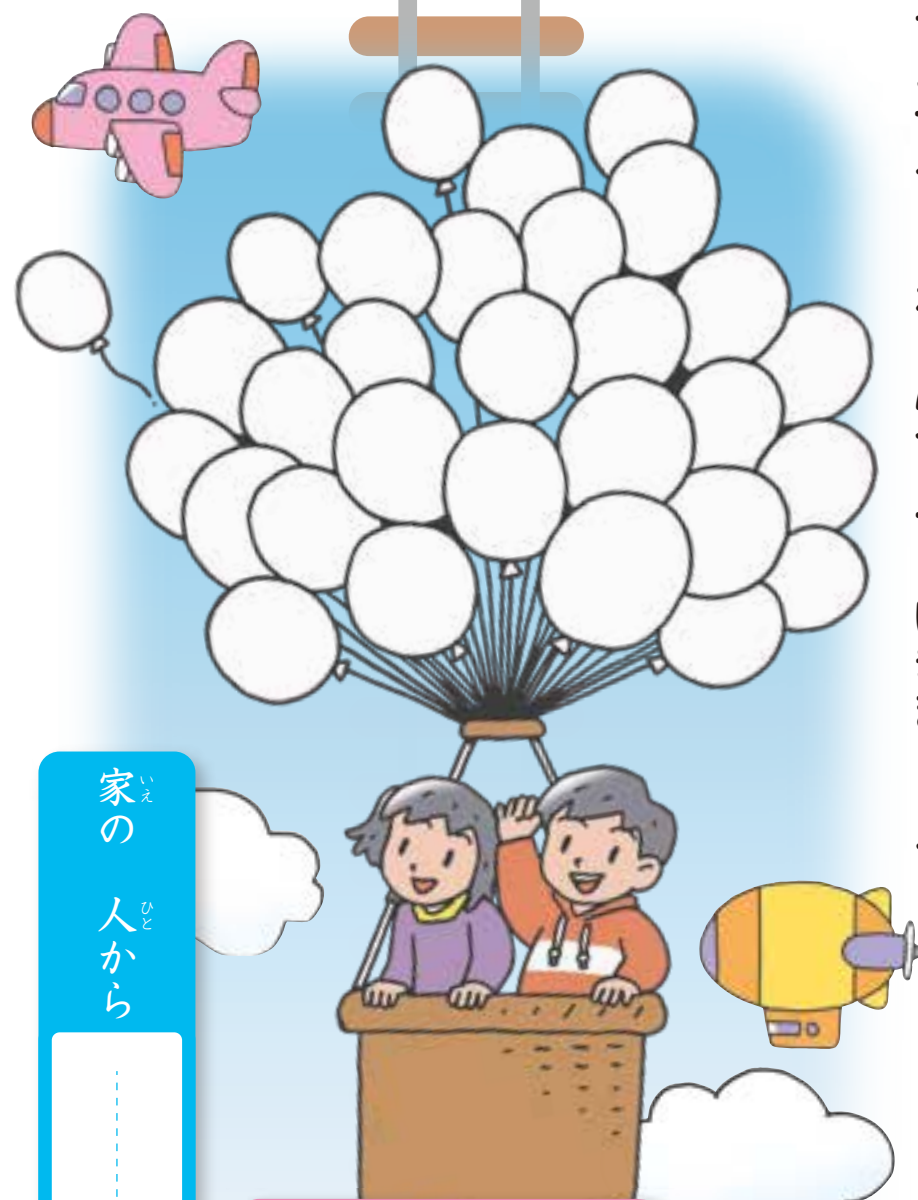


家の 人から

2年

ぬりはじめた日	月	日
ぬり終わった日	月	日

一日を のびのびと 明るい 気持ちで
すごせたら、ひまわりの 花びらに
一まいずつ 色を ぬりましょう。



家の 人から

1年

ぬりはじめた日	月	日
ぬり終わった日	月	日

今日は どんな 一日だったでしょう。
のびのびと 明るい 気持ちで
すごせる 日を ふやして いきましょ。

一日を のびのびと 明るい 気持ちで
すごせたら、いきゅうの 風船に
一つずつ 色を ぬりましょう。

コロコロの コロは、自分の 思い通りに ならないと、
すぐに おこったり もんくを 言ったり します。

ですから、ともだちが いなくな り、今では

ギロ 一人に、なって しまいました。

「コロくん、東のはたけに 行かないか。ナスが
ゆれて、青く 光って いるんだ。きれいだよ。」

と、ギロが さそいに 来ました。

でも、お母さんに しかられて、ふくれて いた コロは、知らん顔です。
つぎの 日、また ギロが やって きました。

「西の かわらに、ほかほかの 麦わらの 山が できたんだ。ねそべると
気持ちがいいよ。」



コロは、(行つて みようかな)と 思ったのですが、すなおに なれません。
「ふん……、麦わらの 山なんて くだらないよ。」

コロは そう 言つて、ことわつて しまいました。

その つぎの 日も、ギロは にこにこしながら やつて きました。

「お父さんに、歌を 教わたんだ。だから、きみにも 教えて やろうと
思ったんだ。きっと 氣に 入るよ。ピピピッピ リリリリリ コロコロコロ。」
とても ちようしの よい、おもしろい 歌です。

「なあんだ。おもしろく ないよ。なんだか、気持ち が わるく なるよ。」
と コロが 言つたので、ギロは、

「もう、きみとは あそばない。」
と 言つて、おこつて 歸つて いきました。

(せっかく ギロくんが、来て くれたのに、わるい ことを 言つて しまった。)
コロは、(あやまらなくては いけない)と 思いましたが、なかなか 言えません。

（あやまるんだ。）

（あやまらなくても いいんだ。）

二つの 心が、たたかって います。

いつまで たっても きまりません。

東の 空から、お月さまが 出て きて、

やさしく コロに 話しかけました。



「コロくん、きみの 顔を、

草の つゆの 玉で 見て ごらん。」

コロは、つゆの 玉に 顔を うつつて

みました。そして、（はっ）と おどろきました。

そこに うつつて いたのは、くらく しずんだ、かなしそうな 顔でした。

「これが、ぼくの 顔なのか。」

しばらく ぼかんと、見つめて いました。そして、なみだが 出て きました。



「さあ、なみだを ふいて、わらって ごらん。」

コロは、長い しよっかくを うごかして、なみだを ふき、小さく

「ピピッ」と、声を出して みました。

「そう そう、元気を 出して、口を 大きく あけて 歌うんだ。」

コロは、はずかしかったけれど、おねを はって 歌って みました。

「ピッピッ リリリ コロコロコロ コロロ。」

コロの 心は、晴れ晴れと して きました。

「すなおで、明るい 声が 出たね。

いつも、その 気もちで いるんだよ。」

コロの 顔は、今までとは ちがって います。

（あしたは、ギロくんに あやまろう。そして、

ともだちと 元気よく あそぼう。）

コロは、そう 心に きめました。

